知的障害者の意思決定支援の実践に関する研究
～南オーストラリアモデルの国内試行を通して～

障害ユニット研究支援者
木口　恵美子

障害ユニット研究協力者
社会福祉法人 さいたま市社会福祉事業団
山本　智美

キーワード：知的障害　意思決定支援　南オーストラリア

はじめに

近年、権利擁護や障害者福祉の領域で意思決定支援が注目されている。木口（2017）は、国内の意思決定支援の議論について文献研究を行い、権利擁護の領域では、成年後見制度との関連で議論され、障害者権利条約に抵触するとして少なくとも促進に反対する見解と、意思決定支援を後見制度の運用の視点として積極的に取り入れる見解に分かれていること、障害者福祉制度の領域では、障害当事者関連団体等からは従来の福祉サービスの枠を超えた新たなサービスの視点として、意思決定支援を捉える見解がある一方で、制度においては成年後見制度や現行の福祉サービスを前提とした支援の仕組みとして具体化する動きがあると整理している。そして、このように権利擁護、障害者福祉制度双方の領域で方向性の異なる見解が示されているものの、双方において支援の充実が求められていることを指摘する。

そこで本稿では、障害者権利条約制定後に南オーストラリアで開発された意思決定支援モデル（以下、SA-SDM）を取り上げ、日本における試行結果の検討を行う。

SA-SDMは、シェア・ニコルソン氏によって開発及び実践され、2015年にスイスの国連オフィスで開催されたZEROプロジェクトの世界会議で、優れた実践として紹介され注目を集めている（名川2016、森地2017）。

日本では、2015年10月に開催された日本弁護士連合会人権大会の第2分科会で紹介され、これまでに開発者は2015年12月に筑波大学で開催された実践モデル講演会、2016年に同じく筑波大学で開催された研修会、2017年9月に東京・大阪で開催された実践ワークショップ[1]で来日している他、2016年2月には日本から研究者等が南オーストラリアに出向き、集中的に研修を受講するなど、関心を集めている。

これまでに、日本でSA-SDMを試行的に行った事例は3件で、2017年7月に実践報告会が行われており、今回その中の1事例について、関係者へのインタビュー結果を踏まえて、日本で実践を行う際の課題等を検討することとする。

用語について、障害を持つ本人は意思決定者または、Decision Maker の略語としてDMと表記する。

1　ワークショップにおいて、講師からSA-SDMはまだ開発段階にあり、今後も変化する可能性があることが示された。

Ⅰ　オーストラリア・南オーストラリア州における支援付き意思決定・意思決定支援モデル（South Australia-Supported Decision Making :SA-SDM）の概要

1　開発のきっかけ

オーストラリア・南オーストラリア州における支援付き意思決定・意思決定支援モデルは、2008年に障害者権利条約に批准したことを契機として、2010年南オーストラリア州権利擁護庁（Office Of the Public Advocate：OPA）がSA-SDMプロジェクトを立ち上げ、モデルの構築と開発を行なった。

2017年以降は、開発者が主体となりモデルの普及と実践を行っている。

障害者権利条約では「障害が、機能障害を有する者とこれらの者に対する態度及び環境による障壁との間の相互作用である」と認めている。障害者権利条約はオーストラリアにおける戦略を決めるにあたり重要な指針になっており、障害者は自分で意思を決定できないという態度を改め、さらにはそのような状況に置かれた環境を克服することを重視している。更に障害者本人と取り巻く友達や家族、サービスで働く人々、広くは住民に対する教育、スキルを身に着ける事も含まれている。

2　SA-SDMの概要と仕組み

SA-SDMは問題解決をするものではなく、意思決定とその実現に向けてのプロセスを経験することで自己実現のために意思決定する力を付ける活動として位置付けている。SA-SDMの概要について、名川（2016）は、単発的な意思決定に要請に対する支援手順の提示ではなく、地域のインフォーマルネットワークを中心とした関わり合いの中で、本人のイニシアチブを維持しつつ、短期集中的に繰り返し支援していくことにより、本人の意思決定における自己効力感並びにスキルを高めていくとともにそのような方略が維持できる環境（地域ネットワーク）を形成する取り組みである。と述べている。

以下、SA-SDM実践モデルにおけるチームとその役割、SA-SDMモデルにおけるプロセス及びSA-SDMの概要について、2015年12月～2017年9月に行われた講演会・シンポジウム・専門職向けのワークショップの内容と資料等を踏まえ解説する。

（1）SA-SDMのチームとその役割

SA-SDMにおいて、FAや意思決定者、トレーナーを含め17名程度がチームとなり、意思決定者の表出された希望を基に本人の意思を確認しながら、どうしたら希望が叶えられるかミーティングを重ね、支援を行なう。チームメンバーはモデルのルールに沿って本人の意思決定支援を行なう事について賛同しており、それぞれの役割が示されている。

以下、チームメンバーの役割を述べる。

① 意思決定者（DM）：何らかの障害により意思決定に困難を抱える本人。チームの最終的な意思決定者として位置づけられており、合意文書に基づき自らの意思を表明する役割と責任を負う。

② ファシリテーター（FA）：SA-SDMモデルの中で、意思決定者の表出された意思を支援するチームの調整役を担う。意思決定者のためのチームを準備し、チームが意思決定者の希望のため、本人にとって意味ある支援になるよう動くこと、コミュニティベースで行動を起こしていくことが求められる。

③ サポーター：本人が選び、無償で本人に寄り添い、合意文書に基づき本人の意思決定を支援する。本人の近しい友人・家族など。いない場合はボランティア等が対応。１チーム１～２人。

④ トレーナー：チームの動向を注視し、FAへの支援及びスキルアップのためのトレーニングを行なう。

⑤　本人の身近にいる人々：家族・友人・ボランティア等、本人にとって身近な存在。

⑥　サービス提供事業者：ヘルパー等現在のサービスに限らず、新たなサービスを提供しうるものも含む。

⑦　地域社会で活動している人々：自治会メンバー、店舗店員、不動産業者等本人が所属する地域社会の構成員。

その他、SA-SDMモデルの構造の外にも数多くのつながりが発生し、構築される。また、⑤～⑦はミーティングで検討される内容ごとに入れ替わる事が多い。

(2) SA-SDMモデルのプロセス

SA-SDMモデルは、約6か月～ 10か月にわたり以下のプロセスで実施される。

①　意思決定者とサポーターのリクルート

意思表出の希望・興味のある人に対しSA-SDMモデルに意思決定者として参加したいか意思を確認、参加を誘う。次に意思決定者に対し、自分のサポーターになってほしい人を選んでもらい、承諾を得られればサポーターの役割につく。

②　合意書の作成とそれに基づく支援の依頼

合意書には意思決定者とサポーターを含むチームの間で関係するすべての人の役割と責任、および合意についてと、意思決定者の表出された希望と受けたい支援について記載する。記載された希望に合致する情報・経験をもっている人に支援を依頼する

③　チーム形成とミーティングの運営

合意書に記載された希望に合致する情報・経験をもっている人を集め、チームを形成していく。ミーティングは1 ～ 2週に1回1 ～ 2時間で運営し、合意書に書かれた希望の実現に向け目的的に、具体的な内容について話し合いがなされる。

④　終結に向けた計画とチーム持続可能性の検討

終結に際してファシリテーター、トレーナーはチームから離れることとなる。意思決定者とその支援チームとの関係が今後も地域で維持できるよう準備される。

3　SA-SDMの特徴

(1) 表出された希望（Expressed wish）

SA-SDMは、本人から表出された希望の実現への支援を根幹においており、表出された希望に対して、本人がどのような意味・価値観を抱いているのか意味を探ることを重要視している。

SA-SDMのシンポジウムや講演会の中では、本人の表出された希望に焦点を当てた支援と本人の最善の利益（Best interest）に焦点を当てた支援を対比して示している。表出された希望に焦点を当てた支援では、本人に意思決定能力があるという前提のもとに、表出された希望・内なる希望や意思と選好に対して支援する。これに対し、本人の最善の利益に焦点を当てる支援は、本人の意思決定能力が不十分という前提で最善の利益を確保するために、本人の想いに対して周囲の見解や意見への誘導や説得といった介入が行われ、結果的に本人の選好や意思とは別の決定になってしまい、本人にとって意味のある決定とは言い難い状況がしばしばおこる。SA-SDMシンポジウム等の中でもこの違いは繰り返し強調され、他者からの表出された希望への介入を憂慮している。

(2) SA-SDMモデルの特徴

SA-SDMモデルの特徴は、意思決定者の表出された希望を主軸におき、常に意思決定者の意思を確認しながら、希望を実現・解決するパーソンセンタード（Person Centered）の立場をとる。意思決定と実現に向けてのプロセスの中で、小さな自己決定や経験を重ねていくうちに自信を重ね自己肯定感を獲得し、次第に自分の意思を表明するようになり、重要でより大きな意思決定をするようになるといった成果も示されており、正にエンパワーメントされた結果であると言えよう。意思決定をする中で実現できた事、変更や実現できなかった事もあるが、SA-SDMは問題解決をするためではなく、

意思決定とその実現に向けてのプロセスを経験することで自己実現のために力を付けていく活動であることを強調している。ひいては、自分で選択し、人生をコントロールしていく、本人の意味ある人生を保障していく活動ともいえる。

また、SA-SDMでは支援を周囲のネットワークを構築・維持しながら行っていく。このネットワークは単に家族や既存のサービス提供事業者にとらわれるのではなく、地域に住む様々な人々も含むことで新しい出会いがもたらされ、これらがチームとなって連携し関わり合う。チームとの関わりから生じる、人に対する信頼感やネットワークは意思決定者の大きな財産となり、地域の人への啓発や教育の機会にもなる。

また、財政条件や特定の障害関連機関のありように左右されないという特徴もある。様々なコミュニティーとのつながりを促進することで、プロジェクト終了後も、意思決定者が住む地域のつながりの中で支援が継続できるというのも大きな特徴であろう。

次に、国内で試行に取り組んだ１チームの事例を検討する。

Ⅱ　事例の紹介

1　チームの概要

2017年7月～8月にかけて、試行に取り組んだ1チームにインタビュー調査を実施した。

DMは、就労継続B型事業所に通っている男性である。

ファシリテーターは、2016年の報告会、研修に参加してSA-SDMに関心を持ち、試行に取り組むことにした。サポーターは、DMが所属する当事者部会の支援者と、DMが通う事業所の支援者である。

2　倫理的配慮

インタビュー調査に際しては、東洋大学倫理委員会の承認を得て行った。調査対象者には書面と口頭で研究趣旨、方法、個人情報保護方針、研究以外の目的には使用しないこと等を説明して同意を得た。インタビューの後、録音をもとにまとめた原稿を調査対象者に送り、内容の確認を得た。

3　調査対象者

調査対象者は、ファシリテーターとサポーター 2名の合計3名で、性別はいずれも女性である。

調査にあたって、以下のインタビューガイドを用いた。

① SA-SDM試行への参加について。
　－SA-SDMに関わるきっかけ。
　－SA-SDMについてどう感じたか。
　－モデルの試行で意識的に行ったこと。

② SA-SDMに参加して、印象に残っている具体的な事柄、出来事。

③ SA-SDMに関わって、良かった点と課題
　－調査対象者にとって良かった点、難しかった点。
　－DMにとって、良かった点、難しかったと思われる点。
　－あなたとDM以外の人にとってはどうか。

④ その他、自由意見。

Ⅲ　結果

1　ファシリテーター（以下FAとする）

（1）モデル試行への参加

FAは研修でSA-SDMに関心を持ち、モデル自体を十分に理解していなかったものの、できる範囲で試行に

取り組むことにした。

モデルで、17名のチームを作ることが示されていることについて、研修時から難しいと感じ、実際に難しく、講師にも理解を求めた。また、FAとサポーターの役割もモデル上は分けられていたが、柔軟な対応が求められる場面が多くあった。

DMに対しても、本人の理解のフォローはかなり必要だった。

最も気を使ったことは、家族（親）への対応で、SA-SDMは新たな取り組みなので、親の理解が必要だが、説明は難しく、研修でも家族との関わりについては触れていなかった。親の安心やDM本人の参加しやすさ、試行のスムーズな進行と説明責任等を考えて、母親を良く知るサポーターの一人に途中経過を伝えることを依頼した。

(2) 印象に残る出来事

事業所の製品を上手に販売したいという本人の希望に対して、事業所に関わりのある企業の営業担当者から話を聞く機会を設けた時、担当者が、本人から現在行っている販売方法を聞いた後で、「ちゃんとできています。良いですよ。」と言った時、それまで下を向いていたDMがぱっと顔を上げたことが印象に残っている。

(3) SA-SDMに関わって良かった点、難しかった点。

ⅰ）FAにとって

取り組みの経過を講師に報告すると、講師から、結果を求めすぎていると指摘を受けた。FAは結果を出すことを求められているのではなく、DMが自分の目標に向かうために何をするかを考えることや、役割を持つように働きかけ、そのこととサポーターの支援をつなげることが大事だと学んだ。

一方、ミーティングには、利便性の良い場所を選んだが、日程・時間の調整が難しく、ボランティアベースで人に集まってもらうことは難しかった。講師からチームの人数が少ないと指摘されたが、増やすことは難しかった。

また、FAはSA-SDMの本質の理解や、本人が気づきを得るための質問の技術や、ある程度の人生経験が必要だと感じた。6か月やり遂げるには、講師とのメールのやり取りや他のFAの協力が重要だった。

ⅱ）DMにとって

DMは、質問をされることで考える機会になり、視野が広がったと思う。営業の人に褒められたことで、周りの人も一目置くようになり、何より本人が生き生きしてきた。

(4) その他

チームの人数を増やすことはとても難しかったが、協力者が多ければ多いほど、アイデアが出やすく、FAにかかる負担も減るだろう。チームの中でサポーターの存在が大きかった。今後は、地域を良く知る適切なコーチング・メンタリングが課題になると思う。

2　サポーターA

(1) モデル試行への参加

FAから、本人たちが経験していない夢を実現する活動をしていると声をかけられ、当事者部会の支援者としてDMと長年の関わりがあったので、引き受けることにした。

DMが希望を実現させるには時間がかかるが、気持ちが沈まないように、気持ちに沿って支援することを考えた。FAの依頼で家族への報告を行ったが、家族はSA-SDMに大きな関心を示したようには思えなかった。

(2) 印象に残る出来事

DMからいくつか希望が出た中で、仲間と一緒にパソコンを習いたいという希望があり、DMがパソコン教室を立ち上げる支援として、仲間集め、公共の会場を借

りるための団体登録、ボランティア講師の依頼等の支援を行った。

DMと出会って10年以上になるが、寡黙な人だと思っていた。1対1で話すことで、関心のあることだと雄弁になることや、携帯で漢字を検索して文章を作成する力があることを含めて、色々な思いや引き出しを持っていることに気づいた。

ボランティア講師の依頼に共に行った後、携帯にお礼が届いて嬉しいと思い、丁寧な人だと思った。

（3）SA-SDMに関わって良かった点、難しかった点

ⅰ）サポーターにとって

DMにとっては、1対1や少人数の中で話すことが大事だが、施設ではなかなかできない取り組みで、家族だと急かしてしまう傾向にあるため、第三者で、待つことができる人との関わりが大切だと感じた。

また、人は何才になっても成長できると心から感じることができた。

一方、DMの都合やサポーターの事情等でDMと会う時間の調整がつかず、進捗が滞ったことや、緊張が原因かもしれないが、DMが言葉では「わかりました」と理解を示しても、実際には分かっていなかったことや、文章で示しても理解が難しかったことがあった。

ⅱ）DMにとって

SA-SDMのような1対1の取り組みで、DMの希望を拾い上げて実現する取組みは、知的に障害のある人には、日常生活では経験できないことだと思う。SA-SDMを通して、多くの初めての経験をしたが、何事も経験しないとできるようにならないし、経験することでDMの自信になったと思う。

DMはインターネットを希望しているが、自宅にPCが無いことや、インターネットの使用による危険の回避が今後課題になると考えている。

（4）その他

DMとサポーターとの間の信頼関係が大事で、初対面の人が関わるのは難しく、今回の試行はDMとの10年以上の関係の上に成り立っていると感じた。サポーターのなり手が限られている中で、いかにマッチングさせるかが課題になるだろう。

3　サポーターB

（1）モデル試行への参加

FAから事業所にDM候補者の依頼があり、その中で決まった人の担当をしていたため、関わることになった。SA-SDMのことは知らなかったが、自分の意思で決めることは大事だと思っていたので、資料を読んで関心を持ち、勉強のためにも参加することにした。

普段関わっていない人が関わり、支援の輪が広がることが大切だと思ったので、支援員として口を出すことは極力控えた。

（2）印象に残る出来事

DMが絵を描くことは知っていたが、広島の原爆ドームをスケッチしたいという希望が出た時に、普段はどこかに行きたいと話すことがないので、「本当は行きたい所が色々あるんだ」と思ったことが印象に残っている。同様にパソコン教室の希望が出た時も「パソコンをやりたいんだな」と思った。

（3）SA-SDMに関わって良かった点、難しかった点

ⅰ）サポーターにとって

支援員としてはDMのことを分かっているつもりだが、知らない部分を知るつもりで、ミーティングで口を出さないようにしたところ、広島に行きたいなど希望を知ることができた。

SA-SDMは、日常的に関わらない人による活動で、そ

の活動を、日常的に関わる自分が知らないわけではないという点がユニークで、新しい関わり方だった。普段は基本的には作業支援を行っており、プライベートで関わることは無いので、SA-SDMを通して同じ目標を持って関わることができたことが良かった。

ただ、支援員として日中の活動の中でできることには限りがあるため、本人が望んでもどこまでお手伝いできたか分からず、その点ではサポーターが複数いて良かった。

ⅱ）DMにとって

DMは、家族への遠慮もあって、旅行に行きたいけれど行けないだろうと、どこかで諦めていて敢えて希望を言わないでいたと思うが、SA-SDMをきっかけに「広島に行きたい」と言えたのだと思う。

SA-SDMに関わることで、FAやサポーターが情報提供やアドバイスを行うなど、DMを支えてくれる人が増えて支援の幅が広がり、実際に叶った希望があるので良かった。また、普段は人に頼らず自分でやろうとすることが多いため、誰かの助けを得てやりたいことを実現できた経験は、彼にとって良かったと思う。

一方で、制度を使って旅行に行くとなると、家族との話し合いも必要となるだろう。

（4）その他

DMに限らず、自分の希望を言えているようで言えていない人は多いと思う。例えば旅行についても、多くの人は自分で計画して旅行に行くという発想そのものがなく、発想がないとやりたいとも思えないでいると思う。誰かの助けを受ければ、もっとやりたいことができると分かれば、「できるならこれをやりたい」ということが出てくるのではないかと思った。一つでも希望が叶うという経験が大切なので、希望が出せて、それが実現するという経験を積み重ねて欲しい。

4　考察と今後の課題

（1）SA-SDMが求めるもの

SA-SDMの試行のプロセスは、FAから講師に報告され、フィードバックを得て継続された。FAが述べていたように、このモデルでは成果を出すことよりも、DMが自分の希望を実現するプロセスに主体的に関わるように働きかけることが求められており、そのために、FAには、質問を通してDMの希望を明確にする技術や、DMとサポーターや協力者をつなげる役割が求めている。

（2）DMのエンパワーメント

SA-SDMの試行を通して、それまで寡黙だと思っていたDMが、自分に関心のあることだと雄弁になることや、パソコン教室の団体名を考えて申請したこと、携帯電話で漢字を検索して文章を作成すること、お礼のメールを送る気遣いができることなど、長年関わってきたサポーターも知らなかったDMの新しい側面や力が表れた。また、作業場面では出ることの無い本人の希望や思いが表出された。これらは、DMが元来自分で持っている力や思いであっても、その力を生かしたり、他者に伝えたり、認められる機会は少なかったのはないだろうか。

また、製品の販売や旅行など、自信がないことや、半ば諦めているかもしれないことでも、1対1や少人数の中では話すことができ、ほめられることで自信をつけていた。

集団で行動することが多い知的に障害のある人にとって、プライベートでの1対1の関わりや、自分の希望のために人が集まるという経験はこれまで少なかったと思われる。本人の希望に基づき、信頼できる人が関わることで、エンパワーメントが促進されたと考えられる。

（3）家族との関わり

今回の事例では、FAから家族への配慮が強調された。DMの希望が、一人暮らしや仕事を変えるなど、DMの生活を大きく変化させることではなかったことや、宿泊を伴う旅行についても具体的な取り組みに至らなかったので、大きな課題にはならなかったと言える。しかし、今回の経験を通してパソコンの購入などをDMが希望すれば、DMの金銭を管理している同居家族への説明や話し合いが求められるであろう。

SA-SDMでは家族の参加は必須ではないが、参加しない場合は、FAもしくはサポーターのいずれかが家族と面識や関係性がある方が、家族の理解を得やすいと考えられる。いずれにしても、FAやサポーターは、SA-SDMの趣旨や目的を理解して取り組むことが必要で、DMに不要な不利益が及ばないように細心の注意が求められる。

SA-SDMが外国で開発されたモデルだけに、日本で取り組む際には家族への配慮や特に同居家族との関わりなどについては、慎重に検討する必要があると考える。

（4）SA-SDMの担い手

これまでに、研修等を経て複数人が試行に取り組んだが、6か月間のプロセスを終了したのは、インタビュー対象者を含めて3名と極めて少なく、FAからは、ボランティアベースで継続することの難しさや、ミーティングに新たな人を誘うことの難しさが示された。

サポーターからは、限られた人の中からマッチングをすることが今後の課題と語られていたが、そもそも知的障害を持つ人は、家族や仕事で関わる人以外の友人・知人のつながりが少なく、限られた人間関係の中でサポーターの担い手を探し、さらにマッチングを考える必要があるため、一朝一夕に解決できる問題ではなく、人間関係そのものを広げる取り組みが求められる。

また、事業所の職員がサポーターを担うことについて、モデルでは以前の担当職員など、現在は直接関わりの少ない人が望ましいと考えられている。インタビューでは、職員として行うことの難かしさも語られている。

さらに、コーチング・メンタリングの問題もある。FAは、講師とのメールを通した指導や仲間のFAのアドバイスが、プロセスを進める上で重要だったと述べているが、講師とのやり取りは英語で行われたため、言葉の問題が大きいことは想像に難くない。また、日本でコーチング・メンタリングを行うには、SA-SDMを深く理解し、FAのモチベーションの維持や指導、プロセスの進行を支えるだけではなく、障害者の暮らしや地域にも明るいことが望ましく、現実にコーチング・メンタリングを行える人材については、今後の課題と言える。

5　おわりに

国内の試行事例が少なく、今回取り上げたのも1事例のみであり、一般化することはできないが、今回の事例では、DMは支援を受けて希望を実現するプロセスを通して新たな経験をし、自らを表現し、自信を回復するなどエンパワメントされていた。その一方で、家族との関わりや担い手の問題等、多くの課題が示された。

SA-SDMを忠実に行うことは、国や文化の違い等から難しい部分があるかもしれないが、これまで日本の障害者福祉の領域では保護や指導を重視し、本人が希望することを本人が実現できるように支援するという当たり前のことが、十分になされてこなかったのではないかと考えると、SA-SDMから学ぶことは多い。今後支援者が、福祉を必要とする人と共に歩むためには、この当たり前のことを当たり前に行うことや、そのことが理解されるように、身近な地域や人々に働きかけることが望まれているように思えてならない。

SA-SDMのプロセスに即した分析が、今後の課題である。

参考・引用文献

木口恵美子（2017）「意思決定支援をめぐる国内の議論の動向」『福祉社会開発研究』No.9，5-12

名川勝（2016）「南オーストラリア州の支援付き意思決定（SA-SDM）とその意義―1015年度支援付き意思決定･意思決定支援実践モデル講習会に基づいて―」『実践　成年後見』62,52-60.

森地徹（2017）「オーストラリア・南オーストラリア州における支援付き意思決定・意思決定支援（S.A.SDM）におけるファシリテーター養成プログラムについて」小澤温（2017）『ケアマネジメントにおける意思決定支援プログラム開発と評価に関する研究（第2報）』平成28年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書，93-100

2015年10月1日，日本弁護士連合会第58回人権擁護大会シンポジウム，会場幕張メッセ，第2分科会資料2,「オーストラリア･サウスオーストラリアにおける意思決定支援（SDM）モデル」

2015年12月14日，実践的SDM開発プロジェクトチーム主催，会場筑波大学東京キャンパス『支援付き意思決定・意思決定支援（SDM）実践モデル講習会』資料。

2017年7月9日，意思決定支援モデル開発プロジェクトチームSDM－Japan主催,会場東京大学本郷キャンパス工学部213大講堂『支援付き意思決定・意思決定支援（SDM）実践シンポジウム』資料。

2017年9月16日～20日、SDM-JAPAN主催，会場筑波大学東京キャンパス『実践的意思決定支援ファシリテーション研修』資料